様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月３１日現在

機関番号：１３２０１
研究種目：若手研究（B）
研究期間：平 成２０年度～平成２３年度
課題番号：２０７３０３３０
研究課題名（和文）不登校の居場所づくりにみる現代のコミュニティ形成――シカゴ学派社会学からの接近
研究課題名（英文）Forming a modern-day community with alternative learning environments for absent students - A case study from The Chicago School of Sociology
研究代表者
高山　龍太郎（TAKAYAMA RYUTARO）
富山大学・経済学部・准教授
研究者番号：00313586

研究成果の概要（和文）：
シカゴ学派社会学の研究法を範例に、不登校の居場所づくりに関するフィールドワークをおこなった。その目的は、不登校の居場所で繰り広げられる具体的な社会生活を描き、スタッフの役割や居場所を規定する価値観などを明らかにすることである。居場所の活動は、(1)諦めと休息、(2)夢中になる、(3)目標との出会い、(4)仲間との共働、という 4 つの局面から構成され、子どもは局面(1)から局面(4)へ少しずつ活動の幅を広げていき、居場所の外とつながっていく。居場所のスタッフの役割は、それぞれの局面での活動を活性化させることであり、そのとき生じるトラブルを解決して安心・安全な場を維持することである。居場所を規定する価値観は、子どもの意思やペースの尊重、競争の排除などであり、学校とは対照的である。「学校的価値観と居場所的価値観の行き来」という観点からそれぞれの居場所が想定する子どもの成長の軌跡によって不登校の居場所を類型化すると、(1)補完型（小回り・大回り）、(2)対抗型、(3)代替型という 3 類型が導き出される。

研究成果の概要（英文）：
In case studies on research methodology by the Chicago School of Sociology, field work was conducted on creating alternative learning environments for truant or absent students. The purpose of the study was to describe a real-life social setting in alternative learning spaces and to identify the critical values that define the role of staff and the alternative learning place itself. The children's activities comprised four phases: (1) resignation and relief (2) engaging in play (3) goal attainment, and (4) cooperation with peers. The child gradually expands the depth of activity through phases one to four, thus connecting the alternative learning space with the outside world. The staff's role in the learning space is to initiate the activity in each phase, resolve issues as they occur, and maintain a safe and relaxed environment. The core values that define alternative learning places are as follows: respect for the child's activity style and pace, removal of peer competition, and deviation from the traditional school model. The categorization of alternative education models considered the child's growth path, as established by each learning place, from the perspective of "transitioning to and from traditional education and alternative education values." The three categories identified are (1) supplementary (shortened or lengthened), (2) counter type-education, and (3) substitute education.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総　計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：社会学
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：不登校、居場所、コミュニティ、社会的排除、ひきこもり、シカゴ学派

１．研究開始当初の背景

不登校の研究は、これまで主に心理学・教育学・精神医学などの分野でおこなわれてきた。これらの研究は社会への個人の適応を問題にしており、子どもは専門家による操作の対象として扱われがちである。一方、社会学の不登校研究は質問紙調査や言説分析が中心であり、不登校の子どもの具体的な日常生活に焦点を定めたものは少ない。ここ 15 年の間に「不登校の居場所づくり」という言葉は不登校への対応として広まってきたが、その活動や運営などの実態を具体的に詳述した研究は少なかった。

２．研究の目的

本研究は、不登校の居場所づくりに焦点を定め、現代のコミュニティ形成という観点から社会全体に位置づけて、包括的に論じようとするものである。不登校の居場所では、ありのままの子どもの全存在を無条件に受容することが目指される。その過程をとおして、子どもたちは、傷ついた自尊感情を回復し、同年輩との親密な人間関係を取り戻すことが期待される。そこでは、能力による序列や専門家の指導は排除され、大人も対等に子どもと接することが求められる。しかし、こうした居場所の目的の達成は容易ではない。たとえば、居場所には場所とスタッフが必要であり、費用対効果などといった経営的な観点が不可欠である。経営にともなう目的-手段的な発想は、「対等な人間関係のなかで、ありのままを受容する」という居場所が目指すコミュニティ形成を阻害するものである。以上のような不登校の居場所づくりをめぐるさまざまな葛藤や困難について、フィールドワークにもとづき具体的に記述・説明するのが、本研究の目的である。

３．研究の方法

富山県の射水市子どもの権利支援センターほっとスマイルを中心に、複数の不登校の居場所についてフィールドワークをおこなった。主な手法は、参与観察とインフォーマルインタビューである。フィールドワークで訪れたところには、居場所、フリースペース、フリースクール、適応指導教室、オルタナティブスクールなど、不登校の子どもが平日日中に通うさまざまな場が含まれる。

４．研究成果

(1)居場所における子ども観と人間関係

不登校の居場所づくりは、「子どもには自ら動き出す力が内在する」という子ども観にもとづいている。これは「十分に休息してエネルギーをためれば、子どもは自然と自分の力で動き出す」という性善説的な前提になっている。それは、「子どもの状態が整わないうちに、登校刺激のような援助的な関わりを大人がすると、子どもの状況がより悪化する」という慎重な態度とも裏表の関係にある。

そうした子ども観にもとづき、居場所におけるスタッフと子どもの間の人間関係の基本形は「子どもを操作の対象としない」 という対等な人間関係である 。言い換えれば、「子どもの自発的な動き出しを待つ」ということになる。こうした居場所の人間関係は、たとえば、あらかじめ定められたカリキュラムがないように大人が目標を設定しないことや、互いの人格やペースを尊重して「声はかけるが、しつこく誘わない」という自由参加や、互いにあだ名で呼び合うような関係に表れている。このような考え方のため、子どもが居場所にいつ来ていつ帰るかも自由である。こうした人間関係の基本形にもとづき、居場所では、何げない日常を自然体でともに楽しく生活していくことが目指される。

(2)不登校の苦しみ

不登校の居場所が目指しているものにつ

いて、現場で明示的に語られることは少ない。実際の活動も、一見、普通の日常生活を送っているだけのように見えて、とらえどころがない。しかし、不登校は「学校に行かない（行けない）」という現象であり、不登校の居場所のあり方も学校という存在に影響されている。

子どもにとって、学校は基本的に他律的な場と言える。そもそも学校に行くことはあたり前とされているうえに、学習目標は大人があたえ、その達成度によって子どもが評価される。そして、子どもたちは、その評価によって将来が決まると信じている。

不登校のつらさとは、「学校に行くことに象徴される大人の定めた他律的な目標、および、それを達成できていない自分」という目標と現実の不一致（アノミー）の状態に置かれ、「そうした不一致を解消せねば自分の将来に悪影響をおよぼす」という思い込みから、焦りや不安にさいなまされることである。その上、周囲の人びとによる「学校に行ったほうがいい」などの言葉かけが子どもにプレッシャーをかける。その結果、子どもは、心身ともに疲労困憊し、学校に行けない自分を否定するようになる。

こうした疲労や自信喪失によって社会性（他者とのコミュニケーション）や耐性（困難を克服する粘り強さ）が低下し、よけいに物事がうまくいかなくなる。自らの心身を守るために、やむなく引きこもる。しかし、孤立した状態で長期間引きこもることは、自己否定の悪循環を生み出しかねない。

(3)居場所の 4 局面とスタッフの役割

「ありのままで居られること」を目指す不登校の居場所は、「他律的な場である学校で自信を失った子どもが自律性を回復する場」と位置づけられる。ここで言う自律性とは、「自分の人生を生きている」という感覚のことであり、これまでも自己肯定感などの言葉で表現されてきた。

居場所における自律性の回復には、以下の 4 局面が考えられる。

不登校の苦しみは、学校への登校をめぐる期待水準と実現水準の不一致（アノミー）にある。したがって、第 1 局面は、「学校に行くという大人が定めた目標を無効化し、目標達成できていない自己を肯定する」となる。そのために居場所は世間的な価値観から隔絶されている必要があり、そうした空間に引きこもることで十分に休息することが可能になる。

第 2 局面は、「何かに夢中になって、『うれしい・たのしい・おいしい』などの肯定的な感情を仲間と共有する」である。その具体的な活動は、自己目的的な「遊び」である。

第 3 局面は、「子ども自らが目標を設定し、その実現に向けて努力する」である。発表会に向けて自分の好きな音楽や演劇の練習をすることが、その代表例になる。

第 4 局面は、「自分たちの居場所の維持・運営に携わる」である。具体的には、ミーティングに参加して、日常の活動やイベントを企画したり、皆がすごしやすいようにルールづくりをおこなったり、居場所運営に参画したりすることなどである。

これらの 4 つの局面は、互いに矛盾する要素などを含んでおり、同時並行におこなうことが難しい。そのため、空間や時間で区分けをおこなったり、自由参加にしたりして、調整している。

子どもは第 1 局面から第 4 局面へ少しずつ活動の幅と輪を広げていき、いわばらせん状に居場所の外とつながっていく。スタッフの役割の第一は、それぞれの局面での活動を活性化させることである。各局面における子どもとスタッフの関係性は、「守護者、カウンセラー」（第 1 局面）、「ガキ大将」（第 2 局面）、「コーディネータ、助言者、評価者」（第 3 局面）、「仲間、同志」（第 4 局面）といったように異なっている。そして、スタッフの役割の第二は、子ども間で生じるトラブルを解決して安心・安全な場を維持することである。

(4)居場所の事業化にともなう困難

そもそも居場所とは、日常の空間や人間関係に宿るものであり、普遍的な存在と言える。たとえば、家庭が安心できて「ありのままで居られるところ」であれば、家庭がその人にとっての居場所と言える。このような居場所は、あってあたり前のいわば空気のようなものである。そうした「普段着の居場所」に対して、不登校の居場所づくりは「居場所のない子どもたちのために居場所をつくる」という目的のもとに人工的に作られた「事業としての居場所」である。そこには、「普段着の居場所」にはない有給スタッフや経営問題などが存在している。

このようなお金にまつわることがらは、「ありのまま」や「対等な関係」を目指す居場所の運営に微妙な影を落とす。居場所の家賃を払い、スタッフの人件費をまかなうには、顧客満足度を上げて利用者を増やして、収益を上げていかねばならない。そこではありのままは許されず、状況にあわせて知恵をしぼり、必要があれば変わっていくことが求められる。

居場所の利用料は、人びとの間に垣根を作る。第一に、経済的理由によって居場所に来られない子どもが出てくる。第二に、利用料を払って支援される子どもと、その利用料を給料として受け取る支援者としてのスタッフという非対称な関係が固定する。給与を受け取ることで、スタッフの専門性や責任が問

われるようにもなる。第三に、そうした支援者と被支援者の二分化にともなって、ボランティアという曖昧な存在が居場所に入りづらくなる。

居場所運営の資金繰りはたいへん難しい。その解決の一つとして、公的資金の導入が目指される。その際に、「子どもの権利」や「教育を受ける権利」などがもちいられる。あらゆる人に平等に保障されるべきものとしての権利のロジックは、居場所が目指すものと親和的である。公的資金の導入は、利用料にともなって生じる人間関係の垣根を取り除くものとして期待される。

(5)不登校の居場所の 3 類型

実際の不登校の居場所づくりは多様なので、「親と子どもの依拠する価値観が学校的世界と居場所的世界の行き来する」という観点から類型化を試みた。学校的世界とは、「他者にあたえられた目標の達成に向けて、集団のなかで役割分担しながら、効率よく仕事をこなしていく」ということが求められる世界であり、いわば近代的な組織人の世界である。それに対して、居場所的世界とは、「自ら定めた目標の達成に向けて、他者に対等な立場で協力を求め、さまざまなものとの調和を図りながら暮らしていく」というものである。いわば、近代文明への批判を内包した個人主体のネットワーク的な世界である。そして、こうした観点から導かれた不登校の居場所の 3 類型では、上述した居場所の 4 局面における力点の置き方がそれぞれ異なっている。

第 1 の類型は、「補完型」居場所である。これは、親の価値観が「学校的世界」に準拠したままで、子どもの成長の軌跡が「学校的世界→不登校→居場所的世界→学校的世界」となる類型である。この類型は、できるだけ早い学校復帰を目指す「小回り型」と、学校に戻ることを急かさないが将来の学校復帰を無意識に想定する「大回り型」に分かれる。小回り型には、教育委員会が設置する適応指導教室や、学校内の居場所づくりである保健室登校や相談室登校などが該当しよう。小回り型の力点は居場所の第 1・2 局面にあり、第 3・4 局面の活動は復帰後の学校で満たされる。大回り型には、公設民営の射水市子どもの権利支援センターほっとスマイルや登校拒否・不登校問題全国連絡会に参加する居場所などが該当すると考えられる。大回り型には、居場所の第 1～4 局面のすべてが見られるが、第 4 局面の活動は弱いように思われる。

第 2 の「対抗型」居場所は、親の価値観の準拠先が不登校を機に「学校から居場所へ」変わり、子どもの成長の軌跡も同様に「学校的世界→不登校→居場所的世界」となる類型である。こうした価値観の転換を象徴的に表すのが「学校信仰」という言葉である。学校信仰とは、「学校に行かないと将来はない」という学校を絶対視する考えである。対抗型の居場所には、「学校信仰の呪縛に気づき、そこから解放されることによって、親も子どもも元気になり、学校に行っていれば味わえなかっただろう充実した生活を送れるようになった」という典型的な語りが存在する。この対抗型には、フリースクール全国ネットワークに参加するフリースクールが該当しよう。その代表は東京シューレである。この類型では、居場所の 4 局面すべてが見られる。

第 3 の「代替型」居場所は、もともと親に「既存の学校に代わる理想の学校がほしい」という気持ちがあり、親とともに子どもも居場所的世界のなかで成長する。この類型には、サドベリー・バレー・スクールなどのオルタナティブスクールが該当する。この類型は不登校支援を目的とはしていないが、小中学生の場合は制度的に不登校となる。実際、学籍は小中学校に残ったままである。ただし、「学校に行けない（行かない）」という否定的な捉え方ではなく「よりよい学校に行っている」という肯定的な立場なので、不登校による葛藤は小さい。したがって、居場所の第 1 局面は重要ではない。

以上の 3 類型では、居場所の捉え方が異なる。居場所での活動は、補完型では「一時的な通過点」と捉えがちであるに対して、対抗型・代替型では「人生そのもの」と考える傾向が強いと言える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 7 件）

① 高山龍太郎，2008 年 11 月 23 日，連帯と公的統制機構のせめぎ合い――シカゴ学派社会学の根本関心，日本社会学会大会（東北大学）

② 高山龍太郎，2009 年 5 月 23 日，初期シカゴ学派社会学のパースペクティブ――第 1 次的関係と第 2 次的関係のせめぎ合い，関西社会学会（京都大学）

③ 高山龍太郎，2009 年 10 月 11 日，不登校の居場所活動におけるスタッフの職務――ある事例から，日本社会学会（立教大学）

④ 高山龍太郎，2010 年 9 月 18 日，不登校の居場所で何がおこなわれているか，日本教育社会学会（関西大学）

⑤ 高山龍太郎，2010 年 11 月 6 日，不登校の居場所づくりをめぐる困難，日本社会学会（名古屋大学）

⑥ 高山龍太郎，2011 年 9 月 17 日，不登校

の居場所における自律性回復の四局面とスタッフの役割，日本社会学会大会（関西大学）

⑦ 高山龍太郎，2011 年 9 月 25 日，不登校の居場所における四局面とスタッフの役割――モデル化の試み，日本教育社会学会大会（お茶の水女子大学）

６．研究組織

(1)研究代表者

高山　龍太郎（TAKAYAMA RYUTARO）

富山大学・経済学部・准教授

研究者番号：00313586

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし